



TITLE:

琵琶湖畔に臨む，藤井天文臺の改裝成る (日食特輯號)

AUTHOR(S):

CITATION:

琵琶湖畔に臨む，藤井天文臺の改裝成る (日食特輯號). 天界 1936, 16(182): 338-339

ISSUE DATE:

1936-05-25

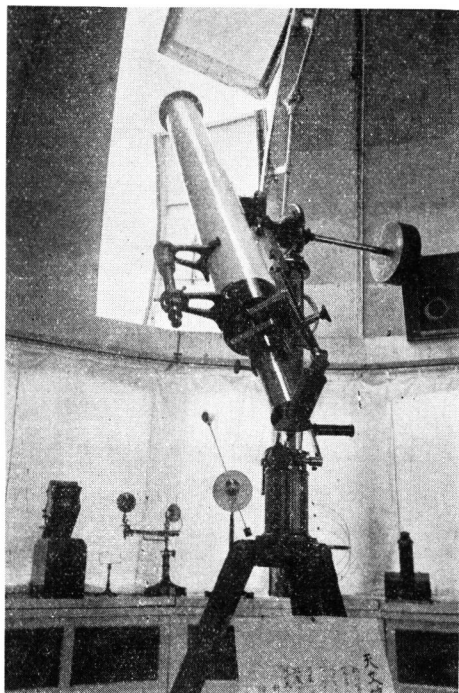
URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167230>

RIGHT:

琵琶湖畔に臨む、藤井天文臺の改裝成る。

本會が天文同好會と稱して創立された大正9年の當初に建設された、有名な近江の大實業家本會名譽會員藤井善助氏の天文臺はドイツ・シタインハイル製16極經緯儀式屈折望遠鏡を主機として、その當初の土星環の消失や火星接近の觀測に、當時本邦最大倍率 500 倍の新銳機として、京都大學初め、數多の天文家連に活用され、學界始め世人に貢獻されて來たが、今般山本博士指導のもとに同機の大改造を行ひ、赤道儀式の据付となし、一層利便多くなつたのを機會に去る4月29日、櫻花満開の天長の佳節に近地在住の知人名士150名を同天文臺のある藤井氏別邸「月光亭」に招待し、大披露宴を張り、山本博士は花山の臺員數名と共に臨席し、大廣間にて先づ、藤井善助氏の同天文臺の沿革經歷談による今回の披露の意義並びに今後、同天文臺の對一般社會層への重要な使命と利用公開を切に希望する見上げた一般開放的の素人天文家としての大貫録を示されて挨拶の後、山本博士の講演に入る、同博士は本協會即ち天文同好會としての、將又京都大學天文臺としての、深い因縁關係を解き、一般天文の興味多い講話を混じつゝ、同天文臺の使命の有意義なるを強調され、本披露に對する敬意を表し、終つて花々しき宴に移る。廣い庭園の彼方此方に陳列された日時計、氣象觀測器械を始め理化學器械等々三々五々見學し、ドーム内には多數の見學者にて日暮れまで賑つたが、曇天のため夜間の觀望は取止められた。



(因みに同天文臺は、誰方でも有志の方に開放、利用される事を希望すると。)

京都理科学研究會の「日食講演會」開かる

去る2月同研究會と本協會共同主催にて日食講習會を開催し、非常な反響を見せたが、今回、既報(天界5月號第245頁)の通り同研究會は本協會と協同のもとに、垂井増太郎氏を主任とせる會員等數名にて日食觀測アマチュア班として代表的な觀測計畫を建て準備を進めてゐるが、之れに先立ち、同研究會では會員100餘名、京都島津製作所科學講堂にて講演會を開き、山本博士を迎へて、時局對策としての日食天文學の講話を聴き、大いに知識の涵養に務めた。

會 員 動 靜

いよいよ迫る日食のため、全國の吾が會員は來往が頻繁となる。

山本會長は中村覺氏と共に去る5月17日夜京都發、東京を経て北海道へ直行、20日中頓別着、小山氏の觀測地を視察、同日夕更に枝幸小學校に柴田氏等の觀測地を訪ね、翌21日雄武を経て遠輕着、更に翌22日上斜里の英國觀測隊と小清水の松隈氏觀測地を視察。其の後、旭川、札幌、水澤、仙臺、東京を経て、27日歸洛した。

木邊成麿氏は去る24日滋賀縣を出發、26日中頓別の觀測地に到着した。

高城武夫、大口周作兩氏は5月28日京都發、30日遠輕に到着の豫定。

又、花山よりのシベリヤ遠征隊山本、稻葉、堀井、濱田4氏は來る6月3日朝いよいよ京都を出發、朝鮮經由、5日新京に一時下車、7日正午滿州里着、翌8日國際列車にて Otpor 驛發、12日オムスク着の豫定。——日食後は6月22日オムスク發、25日滿州里着、月末までには歸洛の筈である。

來る7月、日食大講演會・映畫會開催

日食觀測隊の大成功裡に歸着を待つて、本協會では、京都大阪に於いて大阪毎日、大阪朝日兩社の後援のもとに日食講演・日食天文映畫會を催す豫定。